

令和3年度堺市南区政策会議 各委員会における委員の主な意見

○ 安全安心創出・未来共創推進部会（10月4日開催）

1 施策・事業等の事前評価について

○南区防災活動支援事業（拡充）について

- ・近年、台風や大雨による風水害や大規模地震の発生等を受け、南区自治連合協議会の各校区（地区）において、防災に対する関心や意識が高まっている。一方、南区内の各地域で共助の役割を担う各校区の自主防災組織において、役員の高齢化等により次世代の担い手不足が懸念されており、その育成や最新の防災知識などが求められている。
- ・南区では、令和元年度、各校区（地区）の防災担当者を対象に「防災士養成講座」、令和2年度、「新型コロナウイルス感染症を踏まえた避難所開設訓練」を実施し、防災分野の次世代担い手育成を進めている。
- ・各校区（地区）において、防災分野の共助の中心的な役割を担う防災士を育成し、また、防災士育成の取組を通じ、南区自治連合協議会の各地域の安全・安心なまちづくりの推進することを目的とし、これまでの取組に加え、今年度は福祉避難所開設訓練、次年度以降、高齢者や障害者などに配慮した防災講習会等の開催を予定している。

- ・福祉避難所についてあまり知らなかった。もっと認知されていけばいいと思う。
- ・一般の避難所との違いなど、認知を上げる必要がある。最近では、避難所に避難しないという避難の方法があり、特に支援が必要な方ほど避難所に来ない場合がある。そのような方に福祉避難所をどのように案内するか。また、情報が届きにくい方に対し、訓練自体をPR、周知の機会にするなど情報を受信していただくための工夫が必要である。
- ・障害者への対応について、福祉避難所の開設訓練ではどのような障害の方がいるのか、そして、その障害の特性や配慮の仕方がわからないと、うまく訓練できない。また、情報が届きにくい方に対し、情報を受信していただくための工夫が必要である。地域に要配慮の方がどこにいるのかの把握が重要であり、視覚障害の方については避難所までのアクセス、また、車いすを使用する方については避難所までの距離が問題となる。障害のある方が長期にわたって避難所生活を続けることはかなり難しいため、支援がある場所に早く復帰できるようにすべきである。福祉と防災が手を組んで、中身のあるものにしてほしい。
- ・地域で防災士の資格を取得した者がいるが、防災士として何をしたいかわからないという声がある。継続的な研修をぜひやってもらいたい。
- ・コロナ禍において、要援護者の方々が孤立していると感じる。民生委員では、電話訪問を何回か行った。避難所で何かあったとき、手助けができたらと思う。
- ・一般の避難所から福祉避難所へのつながり方、地域のかかわり方がわからない。コロナ禍ということもあり、地域として運営ができるのかという心配があり、検証していかなければいけないのではないかと。福祉避難所は最重要だが、市民・区民全体の避難のあり方を考え、自宅避難や車避難といった方法も組

み合わせて、もっとも弱い立場の方を守るための福祉的な避難を考える必要がある。

- ・ 校区で区切ると隣の校区の避難所より遠いなど不便な場合がある。また、職員室、保健室、普通教室には冷暖房があるが、体育館にはなく、夏場・冬場は過ごしにくいのではないかと。もし災害が起きれば、各教室を避難場所として利用しながら、一方で通常の教育をどのように再開するかという問題点がある。近くの自治会館や集会場も併用すれば、「共助」となるのではないかと。
- ・ 指定避難所まで時間をかけて来て、スクリーニングして福祉避難所へもう一度移動させることが適切なのか問われるかもしれない。また、避難所の空間の問題、例えば空調など、訓練しないとわからない。防災訓練を子どもたちにも見てもらえれば教育の場にもなるかもしれない。
- ・ 自分たちだけで避難所を開設して受付できるようにということをめざし、自治会で防災訓練をしているが、実際にその方法で開設できるのか、専門家に評価、アドバイス、問題点の指摘をいただきたい。南区の校区同士で共有し、南区全体を専門家に見ていただきたい。
- ・ 災害時、小学校が開いている時間帯とそうでない時間帯で体育館の使用の可否が異なると聞いた。体育館を使用できない場合、どこに避難したらいいのかなど具体的な想定をして訓練を行い、効果を見るのもいいと思う。
- ・ 自治会で要支援者の情報を共有しているが、自治会に加入していない人については、誰がどうアプローチして助けに行くのが課題である。自治会加入促進など、一つの共助のかたちだと思う。
- ・ すべての地域に担当の民生委員がおり、自治会加入、未加入関係なく、日ごろから要支援者に対しつながりを持って活動している。
- ・ 自宅で避難したいという人と逃げたくても逃げられない人との区別が難しいと思う。一人一人の状況を地域やネットワークでどうやって情報共有できるかが試されている。例えば、会社や学校など所属がどの程度、個人のことを把握できているかが重要である。

2 テーマについて

【テーマ】

人や環境にやさしく、安全・安心で快適に暮らせる都市環境の形成などについて

■ 「地域との共創による防災対策について」意見聴取

- ・ 防災において、「自助」、「共助」、「公助」の適切な役割分担に基づく防災対策が必要とされる。
- ・ 「共助」については、発災時に地域住民が連携して、初期活動、情報の収集伝達等が円滑に行われることが重要であり、住民の地域コミュニティ・自主防災組織への積極的参加が求められる。また、防災ボランティアや企業についても救援活動や経済活動の復旧等地域社会への大きな役割が期待されている。
- ・ 人口減少高齢化が進む中、次世代の担い手の不足や自治会活動への参加者の減少など、これまでの考え方に基づく地域での「共助」の対応が難しくなっており、「新しい共助のあり方」を考える時期にきていると認識している。
- ・ 地域と行政、その他さまざまな機関とがともに防災について取り組み、互いに連携しあいながら「共助」

の防災を進めるという観点で、「新しい共助のあり方」を念頭に、地域との共創による防災対策についてご意見をいただきたい。

- 新しいコミュニティの形成が大事である。校区で区切ると、避難所への距離や地形により、校区の避難所とは別の避難所の方が逃げやすいことがある。今ある避難所以外の場所も含め、私たちは実際どこに避難できるのか。一番逃げやすいところに逃げようという考え方で、実際の人の移動を考えながら、新しいかたちで防災に興味のある人を募りながら防災イベントを考えるというのも必要ではないか。
- 離れた自治会同士でコンビを組みあうと助け合える。訓練を見せ合うと励みになり、評価、検証もできる。
- 我が家でよく防災の話をする。家庭で防災の話ができるような、きっかけとなる取組を考えてはどうか。
- 昼間、現役世代は働きに出ているので、中学生の戦力化が必要ではないかと思う。小学生も高学年になれば戦力になる。泉北は高齢化しているので、重要だと思う。
- QRコードを活用して「どこに避難する？」といったアンケートを実施するなどして情報を集めてはどうか。遊び的な取組をとおして家庭で話ができればと思う。本当に逃げる場所を調査することは、福祉避難スペースを探すアイデアにつながるかもしれない。
- 教育機関、障害者機関、文化施設等ネットワークをどのように構築するかに知恵を出し合っていきたい。防災のことを一つの起爆剤にして、地域のつながりや一人一人のつながりを強めていく。つながりがないと町全体が強くないと思う。つながりがある地域が防災にも強いのではないかと思う。
- 災害時に何かするのは当然のことであり、日常的にいかに関わり合っているかが重要である。要配慮の人がいて、どのような配慮が必要なのかといったことは、日常のつながりがないとわからない。防災イベントでもいいし、今ある事業・行事の中に、地域の方が参加するだけで、知らなかった人たちとの出会い・交流の場になると思う。日常の中で出会う機会があると防災のときに役立つ。若い方が出会う場にどんどん出てきてくれるといいと考える。
- 「共助」は人と人が協力するその仕組みをどうつくるかが大事だと思う。日ごろからどう付き合いがあるかが大事なのであり、災害時や訓練時だけ協力するというのは難しい。協力のハードルが高い状況において、人を引き込んでいく仕掛けがあるといいと思う。
- 中学生、小学生もやりたい気持ちはあるが、何をすればいいかわからないという場合もあると思う。防災について授業やイベントなどで知ってもらえたらいいと思う。

○ 育ち学び充実・健康長寿推進部会（9月22日開催）

1 施策・事業等の事前評価について

○南区子ども家庭支援対策事業（拡充）について

- ・家庭やその子どもにアプローチし、虐待や不適切な養育環境を改善するために、地域、区内教育等関係機関と一層の連携強化を図る。
- ・子どもの生き抜く力を育成するワークショップ事業の本格的展開、子ども自身が社会性や自尊心を高める方法を習得することによって、その家族の力を高めていく方法を習得する「前向き子育て応援事業」を実践できる人材の養成並びに地域の子育てにかかる団体及び区内学校等関係機関との連携研修の実施などに取り組む予定である。

- ・不登校の子どもや親など当事者は、このような子どもの生き抜く力を育成する講演やワークショップに参加できていないのではないかと、当事者である方に聞いていただかないと、虐待などなくならないと思う。当事者や学校とのつながりが少ない家庭に情報を届け、参加してもらう仕掛けを考える必要がある。
- ・子どもが不登校をしたままで家にいる場合などは、地域での発見や見守りなど、地域との連携も必要である。
- ・リアルタイムにご参加いただけなかった先生方や保護者からお申し出があったら、オンデマンドで配信するようなシステムを作る。南区にもたくさん学校があるので、できれば同じようなよい情報を南区の財として発信できるようになれば、よりたくさんの方に知っていただけるようになるのかなと思う。

2 テーマについて

【テーマ】

教育と福祉の連携による子どもの生き抜く力の育成や新たな連携モデルの構築並びに健康寿命の延伸などについて

■「自己肯定感」及び「自己有用感」の醸成について意見聴取

- ・プレ会議での意見を踏まえ、「自己肯定感」及び「自己有用感」の醸成について、議論していただきたい。「自己肯定感」や「自己有用感」の醸成には、切れ目のない各々のライフステージに応じた対応が重要であることから、乳幼児期、学童期、青年期、成人・壮年期、高齢期に応じた支援・対応についてご意見をいただきたい。
- ・今回は、乳幼児期、学童期、青年期、次回は、成人・壮年期、高齢期を中心に議論いただく。

- ・声かけ一つによって子どもの心が変わり、家庭でも学校の話をするようになることがある。保護者自身が味方になってくれる効果もあるかもしれない。そうなれば、家庭の協力も得られ、家庭や子どもの状況も話しやすくなり、いろいろな場面で関係づくりができることで、子ども自身の自尊感情が高まるということがあった。
- ・障害のある子どもたちの場合、できないことをできるように、その力を育んでいくことで、自己肯定感の育成につながると思う。保護者とも共有し、喜びを分かち合うことをめざしている。意識的に子どもを生かす・ほめる場面を授業の中でつくり、本人や保護者も「君はこんなにできるんだ」「こんなに頑張

っているんだ」ということをフィードバックしていた。子どもも親もつなげて輪をつくっていくことが重要である。

- ・ 保護者の影響は大きい。親の思うような子どもでないと、家庭の中での一員として成り立つことが難しいと感じる子どももいるのではないか。
- ・ 身体的暴力やネグレクトという虐待もあるが、大学生の場合、学費の面で頼らざるを得ない場合が多く、親からの期待により本来の希望とは異なる進路を選んだというような教育虐待、心理的虐待というものもあると感じる。懇談等により保護者が変わると学生も変わる。
- ・ 特に、第1子の子育てでどういうふうトラブルに対処していいかわからない手探りの状態のときに、先生から「上手に育てていますね」や「今日、こんなことがあったんですよ」と声をかけられるたびに、親としての自己肯定感が上がっていった。また、反抗期の中学生の子どもであってもほめられるとうれしそうにしている。地域での活動においても、関わる保護者に声かけをしたり、親同士でほめあったりすることで、子どもを怒らずに接するきっかけになっている。乳幼児や学童期最初のころは親の自尊感情を高めることも大事だと思う。
- ・ 教育は一生続くものであると思う。子どもの時代にどんな環境を与えるかが大事だと思う。子どもと高齢者とが交流する中では多くのことを学ぶことができ、そういった場は貴重である。親が変われば子どもが変わると感じている。
- ・ 成績が振るわないときに落ち込んでしまうこともある。一方で、ボランティア活動などをおして、いろいろな方に感謝されたりするとうれしく、自己肯定感につながると思う。
- ・ 高校生くらいになると、いじめなどによる自尊感情の低さを取り除くことは難しいことだと思う。子の悩みは親の悩み、親をケアできるシステムがあればと思う。
- ・ 親をどう支えるかということが大きい。深く愛着に問題を抱えた保護者に対して、丁寧なアプローチが必要である。少し話を聞いてもらったり、親同士で集まったり、何時間か子育てから離れる時間があれば乗り越えられる親もいると思う。子どもだけでなく、親の自己肯定感を育むことが同時に重要である。誰かの役に立つと自己肯定感が上がる。子どもや高齢者とのふれあいもまた、自己肯定感を育むのではないか。

○ ブランド戦略推進・魅力創造部会（9月29日開催）

1 施策・事業等の事前評価について

○南区スマート区役所事業（拡充）について

- ・ICT等の技術の導入とすべての人にとってやさしい空間の創造により、安全・安心で高機能な区民サービスを提供する未来型区役所を作り上げていくことをめざし、スマート区役所ロードマップに基づき取り組んでいる。
- ・南区役所の窓口におけるデジタルファースト「お待たせしない」「お書きいただかない」「お越しいただかない」の推進と、すべての人にわかりやすく、「やさしい区役所」をめざし、「デジタルファースト」推進と「デジタルディバイド」支援の両軸で進めている。
- ・市民サービスの更なる向上を目的とし、「混雑状況の可視化」に向け、区役所駐車場の混雑状況をホームページ等でリアルタイムに発信するための機器の設置と庁内案内の向上を図るため、区役所の「サイン」「動線」の検証を行い、新型コロナウイルス感染症対策やユニバーサルデザインを踏まえた各種サイン・表示のリニューアルを行いたいと考えている。

- ・高齢者等、デジタルに不慣れな人が、スマート区役所の網の目からこぼれ落ちてしまう不安がある。役所に行けない、連絡が取れないというような状態にならないようなやさしい区役所をめざしてほしい。
- ・ロードマップに「デジタルサイネージの活用」「SNSの活用」の中で「双方向型への移行」とあるが、まさしく双方向型というのが必要になってくる。つながりがほしい場合にはTwitterやLINEもあるが、あまりにも範囲が広すぎる。南区限定か堺市全域かは議論の余地はあるが、市民同士がつながれるように、市民が参加を募集できる、子育てをしている家族同士などが交流できる、そういった仕掛けが必要ではないか。
- ・情報を共有する方法も若年層と高齢者では異なることから、デジタルとアナログの混在する形が必要である。例えばTwitterとそれに連動したアナログの掲示板が実現できればと思う。また、区役所やサービス機能を備えたサテライト施設が点在するようになればエリアイノベーションだと思う。
- ・民間は効率化を求める傾向がある。スマホ操作が苦手な方やスマホを使わない方がいて、ICTを導入することになると、スマホ・パソコン・タブレットありきになる。スマホ等の操作が難しい方に配慮して、コストがかかるかもしれないがサポートを行い、やさしい区役所を実現してほしい。
- ・ロードマップ等においても、「やさしい区役所」とはあるが、デジタルの操作が不慣れな方に対する具体的な取組が項目として出てこない。たとえば見守りのロボットなどサポートの視点を、スマート区役所を考える上で持っていただきたい。
- ・スマート区役所やスマートシティを推進するうえで、セキュリティ上の問題を解決することが重要。市民が安心してアクセスできるように、セキュリティを確保していただきたい。
- ・デジタル化では官民のスピード感の差がある。行政は今ある仕事の効率化に偏りがちだが、地域コミュニティの活性化の視点も非常に重要。民間の取組と速度を合わせる。特にロードマップでは2030年までとあるが、想定よりも早くデジタル化が進んでいくと思われ、区役所も臨機応変に、前倒しすべきも

のがあれば前倒しすべき。

2 テーマについて

【テーマ】

スマート区役所、スマートシティ、南区ブランド戦略の推進などについて

■「南区ブランド戦略の推進」及び「新たなブランドの創出」について意見聴取

- ・南区では、課題である人口減少をくい止め、人口定着及び若者世代をはじめとした人口流入をめざすことが重要であり、区民の生活の向上や南区ブランドの創出など、魅力的な都市空間を新たに創造することで、南区に「行きたい」「住みたい」「住み続けたい」につなげていくことが求められている。
 - ・南区の定住人口、交流人口、関係人口の増加に向け、南区ブランド戦略を推進するためにはどうしたらいいのか。また、南区の新たなブランドの創出に向け、何が南区の新たなブランドになるのかなどのご意見をいただき、南区の人口増加に向けブランド戦略のストーリーを描いていただきたい。
-
- ・「Play SENBOKU」というコンセプトが素敵だと思う。スマートはネガティブな感情を生む可能性があるのも、「面白い」「わくわくする」という感情に訴えてブランディングすべき。高齢化はリスクや脅威ではなく、むしろチャンスと考える。手段としてのスマートシティは素敵な流れ。新しい技術を住民のワクワクにどうつなげていけるかについて議論していきたい。
 - ・南区には歴史上の人物に関する逸話が残っているが、知らない人が圧倒的である。南区には宝の山がいっぱいある。
 - ・泉北のもともと持っている強みをいかした資源の選択と集中がやや弱い。65歳以上の人口が多く貴重な財産の一つ。そこを強める必要があるのではないか。デジタル化は世の中の的に当たり前の流れなので、南区としてのオリジナリティが弱い。どこに注力すべきかを議論すべきである。
 - ・人口を増やすということだけではなく、多世代が暮らす地域をめざすことが重要であるが、若い世代をいかに呼び込むかも大切な論点である。
 - ・現状のままではなく、常に新しいものを生み出していくことが不可欠であり、新しいものがどんどん生まれる状態そのものが南区のブランド力になると思う。